

5. 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① 単元構成の見直しと工夫をし、体験活動を焦点化することにより、確かな学びと地域への愛情や誇りに思う心を育てることができた。

生活科では、活動後の振り返りや地域の人との双方向のやりとり（資料1）など、伝え合い交流する活動を意図的に設けたことが、気付きの共有化を図り、自覚した気付きへと高めることにつながった。また、他の児童から気付きを認められることで、児童は達成感・成就感を味わうとともに次の活動への意欲を高めていった。

総合的な学習の時間では、「現在」「過去」「未来」の3部構成で進め、児童の思考の流れに沿った単元構成を工夫したことや、内容を他教科と関連させたり合科的に扱ったりしたことで、学習展開をスムーズにすることができた。また、「パンフレットを作る」「創立100周年記念式典で学習したことを発表する」「大蔵ふるさと検定で大蔵のまちのことをもっと知ってもらおう」といった、学習の終わりに全員が調べたりまとめたりしたものが1つの成果として集約されるイメージしやすいゴールを

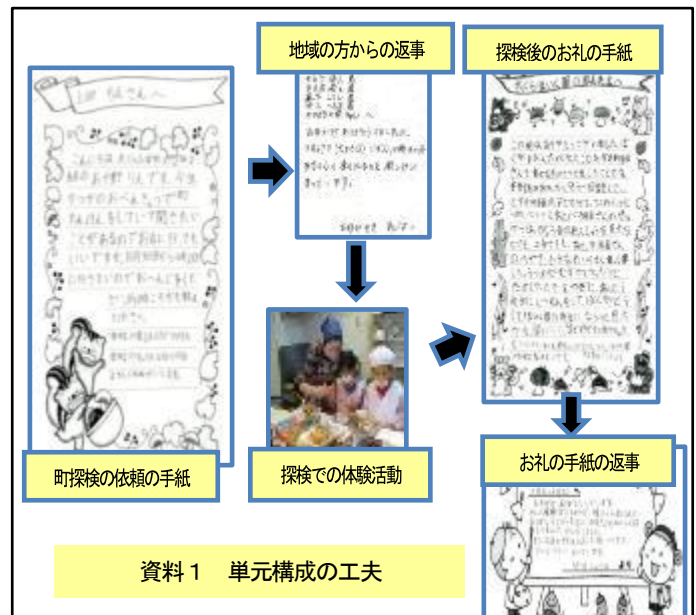
定め、共同的な探究が続きやすい展開を工夫した。その結果、多少の個人差はあるものの、大蔵のまちのことに興味や関心を深めたり、次の活動の課題を自らもつことができたりする児童（資料2）が増えてきた。

② コミュニケーション活動を重視した探究的・協同的に学び合う活動を仕組むことを通して、大蔵の魅力やよさに対する多様な見方や考え方を広げることができた。

生活科では、地域の人との交流を重視した結果、地域に親しみや愛着を持ち、進んで人とかかわることができるようになった。また、伝え合い交流する態度の習得が、児童に自信と意欲をもたせ、自分にできることを進んでする自立の心を芽生えさせることにつながった。

総合的な学習の時間では、「歴史（過去）」の学習では、自分たちが知り得ていないことや必要な情報を、GTの方の話を聞いたり校長先生に尋ねたりして調べ、コミュニケーションを図りながら学ぶことの大切さを感じ取っていった（資料3）。また、社会科の全国史と重ね合わせながら大蔵のまちの歴史について調べてまとめるようにしたので、全国と大蔵のまちの動きや先人の働きなどを関連付けて考えさせることができた。

③ 教師が適切な支援を行い、指導と評価の一体化をさらに図ることにより、自己の高まりや成長を



資料1 単元構成の工夫

- ・大蔵川のことを地域の方は大切に思っていて、これからも「大蔵川クリーン作戦」をして、川を守っていくことが必要だということが分かった。
- ・インターネットや本では分からなかった情報も、地域の詳しい方にインタビューをしたら分かったので、やっぱり地域の方々はすごいなと思った。
- ・今の大蔵のまちのことは分かったから、昔（以前）の様子がどんなのであったか知りたい。

資料2 大蔵のまちに対する児童の意識

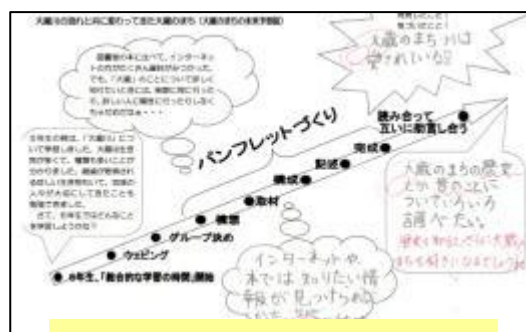
- ・土佐野さんは、「資料を見るように。」とアドバイスをくれ、芳賀さんは資料にないようなことを教えてくれました。これをもとにグループで調べていきたいです。
- ・土佐野さんと芳賀さんのおかげでよく分からないことが解決した。ぼくたちがもつ情報が深まった。

資料3 歴史年表作り後の児童の感想

実感し、学び続けようとする子どもが育った。

生活科、総合的な学習の時間ともに「まとめ・表現」する活動では、中間発表会としてグループごとに調査結果をまとめ発表する場を設けた。このことで、互いの考えを共有したり、修正したり深めたりすることができ、他者と協同して課題を解決する協同的な学習をすることができた。さらに、自分の考えを振り返ったり、友達の考えと比較したりする中で、協同的な学びのよさを味わわせ、自己の高まりや成長を実感させることができた。

また、一人一人の興味・関心を、児童のノートや記録などのポートフォリオからつかんだり（資料4）、対話を通して思



資料4 児童のポートフォリオの一部

いや願いを見取ったりすることで、個に応じた支援や助言ができた。そのことにより、子どもたちの学習意欲を一層高め、身に付けた問題解決能力を駆使して学び続けようとする児童が増えてきた。

④地域教材を大蔵川から広げていったので、学習する内容の他教科との関連が深まり、各学年魅力ある取り組みができた。

今年度は、昨年度の取り組みを発展させ、地域教材を大蔵川からさらに地域の「ひと・もの・こと」の視点で教材化を進めた。その結果、これまでにないフィールドワークや体験活動が図れたり、様々な人との出会いがあったり、新たな校区の足跡にふれることができたりした。特に総合的な学習の時間では、社会科等で学習する内容との関連が深まり、教科を横断した取り組みができたため、児童にとって多面的な見方、考え方につながり、児童の学習意欲を高めることにつながった。

(2) 今後の課題

① 単元構成の見直しと工夫をし、体験活動を焦点化することについて

生活科は、内容項目が指導要領に記されているので、国語科など他教科との関連を一層図り、指導計画を大幅に見直さなければならない。また、2年生の生活科と総合的な学習の時間とのつながりが明確になっていない点もある。生活科の学習範囲は、校区内が原則なので、「河内貯水池までの探検」は3年生以上の総合的な学習の時間で取り扱うように計画していく。さらに、そのほかの活動に関しても、3年生以降の総合的な学習の時間とのつながりを考えた視点で、2年生の生活科の単元構成を見直していく。

総合的な学習の時間では、児童が主体的に調べたり行動したりできる時間の確保が必要である。また、児童が自ら計画したり活動したりするような場の設定と計画的な時間配分を考えていく必要がある。活動においてGTに頼っている面があり、GTが動けないときに活動がうまくいかなかったり、教師の準備が不十分になることにもつながったりするので、そのことも考えて計画していく必要がある。

自然を取り扱う単元の場合、事前に生態や植物の特性などを調べ、単元の導入時期や活動内容を考慮する必要がある。また、活動計画を立てていても天候によって活動が左右され変更を余技なくされることも多い。GTとの連絡も含め余裕をもった計画を立てておくことも必要である。

4年生のカリキュラム（大蔵プラン）は、大幅な見直しを行った。内容を広げすぎた面があったので、「福祉」を中心テーマに位置付け、今年度の取り組みを生かして活動内容や対象を取捨選択し、カリキュラムの修正を行っていく必要がある。

生活科・総合的な学習の時間ともに70時間の単元計画が、「児童の意欲が継続できるか。」「単元の流れが適切か。」「目指す子ども像につながるか。」などの視点で適切であるか見直し、必要に応じて70時間を分けていくつかの単元で構成することも考えていく必要がある。

② コミュニケーション活動を重視した、探究的・協同的な学習活動について

生活科では、「伝え合う活動」をさらに充実させなければならない。今回、グループでの探検後の発表会は、グループを編成し、ポスターセッション形式で発表を行ったが、少人数グループで伝え合う活動をもっと増やしていけば、気付きの質はさらに高まったのではないかと考える。

総合的な学習の時間では、地域の歴史に関する資料が少なく、GTの方の話がとても役に立ったが、GTの方も分からないことなどについては想像や予想の範囲での内容をまとめるしかなかった。今後新たな資料の収集や人材の確保が必要である。さらに、学習したことを地域や保護者、他学年の児童などに情報を発信していくなど情報発信の仕方や場などを工夫していく必要がある。

③ 教師の適切な支援と指導と評価の一体化について

自分の考えをもつことや友達の考えと比較したり、関連付けたりする経験を積み重ねてきてはいるが、個人差が非常に大きい。また、評価規準については、各学年間で調整が不十分であったり、具体的でなかったりする面があった。今後、評価規準の具体化とその規準をもとにした評価を行っていかなければならない。そのためには教師の見取りをもっとしっかりとしていくことが大切である。

他教科との関連づけを明確にし、各教科でしっかりと学力をつけ、総合的な学習の時間でその力が活用できるようにし、総合的な学習の時間の「質」の底上げを図りたい。

④

《参考文献》

- ・ 文部科学省『小学校学習指導要領解説（総合的な学習の時間編）』日本文教出版株式会社 平成20年
- ・ 田村 学 著 『いのちを育てる総合学習 全6巻』童心社 平成20年
- ・ 田村 学 嶋野道弘 著 『これからの生活・総合』東洋館出版社 平成21年
- ・ 無藤 隆 著 『小学校教育課程講座』ぎょうせい 平成20年